

中学生の「居場所環境」と学校適応との関連に関する研究

筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科 杉本 希 映

筑波大学大学院人間総合科学研究科 庄 司 一 子

本研究では、中学生における「居場所環境」の様相を明らかにし、「居場所環境」と中学生の学校適応との関連を検討することを目的とした。「居場所環境」とは、どのような特徴を持った「居場所」を、どのようなバランスで有しているかを表すもので、個人が有する複数の「居場所」を総合的に捉えるために、新たな視点として導入した。その結果、中学生が「居場所」に選択する場所は、自分の部屋と教室が多いこと、「居場所環境」と学校適応には関連があることが明らかとなった。それらの結果を元に、実践への示唆を含めて考察した。

キーワード：「居場所環境」、学校適応、中学生

問題と目的

我が国の中学生の長期欠席者数は、2002年度より減少は見られるものの、2005年度現在、依然10万人を超えている。さらに近年では、登校はしているものの登校忌避感情を有している生徒の問題も指摘されており（古市，1991；菊島，1999；五十嵐・萩原，2004），看過できない問題となっている。

子どもの「居場所」への注目は、そのような不登校問題に発する。1980年代、学校に居場所がない子どもたちのための「居場所」として誕生したフリースクールが現在の「居場所」への関心の起源であるといわれている（安斎，2003；住田，2003a）。1992年には、文部省学校不適応対策調査研究協力者会議が「登校拒否（不登校）問題について - 児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して - 」という報告を出し、学校内での「心の居場所」づくりの必要性が指摘された（文部省，1992）。さらに2003年には、文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課が「子どもの居場所づくり新プラン」（生涯学習政策局子どもの居場所づくり推進室，2004）により、国の施策として学校外での「居場所」づくりが行われるに至った。このように子どもの「居場所」は、「居場所」がないことへの注目から、学校内外において「居場所」を作るといった動きに進展しつつある。

そのような中で、「居場所」を実証的に分析してい

く動きが、1990年代後半から見られるようになるが、課題も多い。まず、「居場所」という言葉の定義であるが、「児童生徒が存在感を実感することができ、精神的に安心していることのできる場所」（文部省，1992）、「安心して身を置くことのできる場所」（上野，1992）というように、単に「人がいる居場所」という辞書的な意味だけではなく、心理的な意味が含まれているものが多い。しかし、いまだ定義は確立しておらず、使用者によって異なっているのが現状である。

これまでの実証的研究における「居場所」の捉え方は、大きく2つに分けられる。1つ目は、実際に人が居る場所を「居場所」と捉え、調査する方法で、例えば、学校を調査対象とした研究（深谷・永井・山田，2001）などがあり、心理的な意味を含めない辞書通りの「居場所」研究としては、意義のあるものである。しかし、確かに物理的に居る場所ではあるが、「居場所」とは感じていないという場所も含まれてしまうため、本人の主観が無視されることとなる。2つ目は、「ここは自分の居場所である」と知覚した場所を調査対象とし、分析する方法である。これらは、対象者から居場所と感じる場所を挙げてもらい、それら进行分析する手法を取っており、「居場所」の心理的な意味を探っていく手法として適しているといえる。しかしこのアプローチには、上述したように「居場所」の概念が統一定義を得ていないために、対象者個人の捉え方

により「居場所」が違ったものになるという問題が生じる。「自分の好きなマンガの中」といった空想の世界の中を「居場所」という人もいれば、「友だち」のように場所ではなく人を「居場所」と捉える人もいるだろう。よって、研究によって捉えたい「居場所」を操作的に定義していく必要がある。

以上の点を考慮し、本研究においては、2つ目の個人の主観による「居場所」を捉える方法を採用することとした。操作的定義は、初めから「落ち着く場所」のように限定的に捉えることは避ける。しかし、「居場所」であると自分で知覚している場所であることと、日常生活の具体的な場所であること、という本研究で捉えたい「居場所」を分析対象とするために、そこでの精神状態を限定しないことを考慮し、「いつも生活している中で、特にいたいと感じ、いられる場所」とし、調査時に質問紙に付記することとした。「いたい場所」とは、「自分が居場所と感じている場所」という主観性を示したもので、単に人がいる場所としての居場所と区別するために設定した。

杉本・庄司(2006)は、現代の小・中・高校生の「居場所」の心理的機能には、「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考・内省」「自己肯定感」「他者からの自由」の6つの因子があることを明らかにした。また、「居場所」を「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「家族以外の人のいる居場所」の3つに分類して分析を行い、それぞれの「居場所」の持つ心理的機能の固有性を明らかにした。この結果から、特に

中学生以降の子どもたちは、1つの「居場所」ですべての機能を充足することは困難であり、発達に応じて、固有の機能を持った様々な「居場所」を複数持つことが必要であるという示唆を得ている。以上の点から、「居場所」研究は、個々の「居場所」が持つ固有性の面からの分析と、それらを組み合わせて個人が持っている複数の「居場所」を包括的に捉えて分析することも必要である。

これまでの「居場所」に関する実証的研究は、他にも「居場所」の形成要因を探り「居場所感」尺度の作成を行う研究(堤, 2002; 大久保・青柳, 2000; 小畑・伊藤, 2003)、「居場所」を分類してその特徴を明らかにする研究(松田, 1997)、発達のな変化を分析する研究がある(富永・北山, 2003; 住田, 2003b)。これらの「居場所」研究は、個々の「居場所」の形成要因や特徴を明らかにしているが、個人を取り巻く複数の「居場所」を総合的に分析することは行われてはいない。この点を考慮した実証的研究が、「居場所」研究には必要だと考えられる。

そこで本研究では、個人を取り巻く「居場所」を包括的に捉えるために、「居場所環境」という視点を導入した。「居場所環境」とは、どのような固有性を持った「居場所」をどのようなバランスでいくつ所有しているのかを表す用語として使用する(図1, 表1)。「居場所環境」と心理的諸側面との関連の分析が進むことで、本来の問題定義でもある不登校問題への介入に近づけると考えられる。しかし、「居場所」と心理

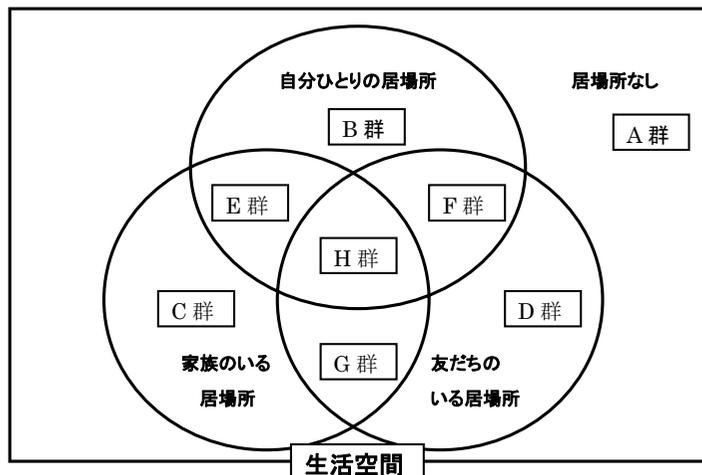


図1 本研究における「居場所環境」の分類図

表1 「居場所環境」の8分類と文中の略語

分類の内容	(略)
A群 「居場所なし」	(なし)
B群 「自分ひとりの居場所」1種類のみ	(ひとりのみ)
C群 「家族のいる居場所」1種類のみ	(家族のみ)
D群 「友だちのいる居場所」1種類のみ	(友だちのみ)
E群 「自分ひとりの居場所」と「家族のいる居場所」の2種類	(ひとり+家族)
F群 「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」の2種類	(ひとり+友だち)
G群 「家族のいる居場所」と「友だちのいる居場所」の2種類	(家族+友だち)
H群 「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」の3種類	(3種類すべて)

的諸側面との関係を分析した研究は、まだ非常に少ない。抑うつ感との関係を分析した田島(2000)は、「居場所」がない人の抑うつ感が高いことを明らかにし、「居場所」がある感覚が抑うつ感と自己肯定感に關係する重要な感覚であるとしている。また、自我同一性との関係を分析した堤(2002)は、同一性混乱の度合いが高い人ほど、自分の居場所がないと感じる傾向を明らかにしている。学校適応と「居場所」との関係を分析したものとしては、田中・田嶋(2004)の研究が挙げられる。この研究では、学校内の「居場所」と学校適応が関連していることを明らかにしている。しかし、学校外の「居場所」との関係を分析したものはまだ見当たらない。不登校問題から注目された「居場所」ではあるが、実証的な研究はこのようにまだ十分蓄積されていないのである。「居場所」という概念ではないが、大久保・加藤(2005)は、中学生・高校生・大学生を対象に「個人環境の適合の良さ」という概念を用いて、個人と環境の適合性(個人の学校における心理的欲求から学校環境からの要請を引いたものを個人環境の不一致得点とし分析している)と学校適応との関連を検討している。その結果、中学生においても、個人の心理的欲求や学校環境からの要請よりも不一致得点の方が適応感と関連していることが示されている。したがって、個人が環境をどのように認知しているかを捉える「居場所環境」と学校適応との関連を検討することは意義があることと考える。

以上より、本研究では「居場所環境」という視点を導入し、現代の中学生の「居場所環境」の様相を明らかにするとともに、その違いにより、学校適応との関連を検討することを目的とした。分析においては、中

学生の学校適応や不登校傾向におけるこれまでの研究(例えば、古市, 1991; 五十嵐・萩原, 2004)により、性差が明らかにされていることから、本研究においても性差の検討を行うこととした。

方 法

1. 調査対象者と手続き

首都圏内公立中学校1校、1年123名(男子54名、女子69名)、2年131名(男子70名女子61名)、3年128名(男子68名、女子60名)、計382名に対し、2005年2月中旬に各学級で学級担任が一斉に配布し、その場で回収した。調査校は、中規模校であり、反社会的問題も少なく、不登校生徒数も市内他学校と比べて少なく、落ち着いた雰囲気のある学校である。スクールカウンセラーは週1回勤務しているが、教育相談において年間を通して生徒に対し特別な活動(ソーシャルスキルトレーニング、ピアサポート)などは行っていない。

2. 調査内容

- (1) フェイスシート: 学年、性別
- (2) 学校適応: 古市・玉木(1994)の学校生活享受感尺度、10項目を4件法により回答を求めた。この尺度は、高い信頼性が確認されており、適応傾向との基準関連妥当性の検討も行われている(古市, 2004)。また、調査者の負担や抵抗感を考慮し、「学校ざらい尺度」を反転させて作成してある点から、学校適応を測定するには適していると考えられる。
- (3) 「居場所環境」に関する質問: まず現在の「居場所」の有無を2択で回答を求めた。この質問に対して

「ある」と回答したもののみ、「居場所」の具体的な場所を最大5つまで自由記述してもらい、その各「居場所」に対して、「1：自分ひとり，2：家族がいる，3：友だちがいる，4：家族・友だち以外の人がいる（誰かを具体的に記入）」のどれにあてはまるか、あてはまる数字1つの選択を求めた。なお、自分の「居場所」として記入を求めているので、自分自身がその「居場所」にいたことが前提となっている。例えば、「2：家族がいる」とされた「居場所」においては、家族だけではなく自分自身もその「居場所」にいたということである。また、その他の場合も同様である。

結 果

1. 「居場所環境」についての分析

(1) 「居場所」の自由記述の集計

まず、「居場所」の有無については、「居場所」がある生徒261名（70.5%）、ない生徒は109名（29.5%）という結果であった。個人が持つ「居場所」の数を検討したところ、「居場所」があると答えた生徒の「居場所」の数の平均値は、2.39であった。次に、「居場所」があると答えた生徒の自由記述を集計した（表2）。最も人数が多かったのは、1つ目に記入した「居場所」では、「自分の部屋」、2つ目では「教室」、3つ目では「自分の部屋」であった。1つ目から5つ目まです

べての回答を集計したところ、1位は「自分の部屋（181名）」、2位は「教室（133名）」、3位は「家（77名）」、4位は「リビング・茶の間（52名）」、5位は「部活・グラウンド・体育館・卓球場・道場（29名）」という結果であった。「居場所」がある生徒の中で、「居場所」に「自分の部屋」を選択しているのは72.9%、「教室」は53.6%となっており、中学生の主要な「居場所」であることが明らかとなった。

(2) 「居場所環境」と個人属性との関連

5つまで挙げてもらった「居場所」のそれぞれを、「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」「家族・友だち以外の人がいる居場所」のどれにあてはまるかを回答してもらった結果を元に、表1のように、「居場所環境」をA群（なし）からH群（3種類すべて）まで8分類した。例えば、自分ひとりの時の「自分の部屋」と、家族のいる「リビング」を挙げた生徒は、「自分ひとりの居場所」と「家族のいる居場所」の2種類を持つE群（ひとり+家族）となる。なお、「家族・友だち以外の人がいる居場所」は、選択した人数が少なかったため、分析から除外した。

「居場所環境」と学年・性別との関連を検討するために、²検定を行った。学年による有意差は認められなかったことから（ $\chi^2(14) = 8.13, n.s.$ ）、学年と「居場所環境」は関連がないことが明らかとなった。

表2 「居場所」の自由記述の3つ目までの集計人数

			1年	2年	3年	計
1つ目	1位	自分の部屋	34 (41.0)	47 (77.0)	46 (54.1)	127 (49.0)
	2位	教室	28 (33.7)	14 (15.4)	8 (9.4)	50 (19.3)
	3位	家	17 (20.5)	10 (11.0)	16 (18.8)	43 (16.6)
	自由記述の合計		83 (100)	91 (100)	85 (100)	259 (100)
2つ目	1位	教室	18 (27.3)	24 (33.3)	24 (37.5)	66 (32.7)
	2位	自分の部屋	13 (19.7)	12 (16.7)	9 (14.1)	34 (16.8)
	3位	家	4 (6.0)	13 (18.1)	7 (10.9)	24 (11.9)
	自由記述の合計		66 (100)	72 (100)	64 (100)	202 (100)
3つ目	1位	自分の部屋	6 (16.2)	6 (14.3)	3 (13.6)	15 (14.9)
	2位	教室	9 (24.3)	4 (9.5)	1 (4.5)	14 (13.9)
	3位	リビング	1 (2.7)	7 (16.7)	3 (13.6)	11 (10.9)
	自由記述の合計		37 (100)	42 (100)	22 (100)	101 (100)

（カッコ内は自由記述の合計数を100%とした時の%）

性別では、有意差が認められ ($\chi^2(7) = 21.76, p < .01$), 残差分析の結果, A群(なし)では男子の方が女子より多く, F群(ひとり+友だち)とG群(家族+友だち)では男子の方が女子より有意に少ないという結果が得られた(表3)。よって性別が「居場所環境」に関連していることが明らかとなった。

2. 「居場所環境」と学校適応との関連

(1) 学校享受感尺度の構成

学校享受感尺度10項目について、因子分析を行った。固有値が5.18, .94, .69と順に減衰しており、この1

因子に寄与する負荷量が.40以下の項目はなかったため、1因子構造が妥当であると判断された(表4)。クロンバックの係数は、.89であり、十分な内的整合性を有することが確認された。

(2) 「居場所」の有無と学校適応との関連

学校享受感尺度について、性別と「居場所」の有無を要因とする分散分析を行った(表5)。交互作用が有意 ($F[1, 337] = 13.32, p < .001$) であったため、単純主効果の検定を行った。その結果、男子・女子とも「居場所」の有無の単純主効果が有意(男子: $F[1, 337] = 4.40, p < .05$, 女子: $F[1, 337] = 42.05,$

表3 「居場所環境」別人数と性別との関連

χ ² 値	自由度	Cramer's V	「居場所環境」別人数(調整済み残差)								
			A なし	B ひとり	C 家族	D 友だち	E ひとり+ 家族	F ひとり+ 友だち	G 家族+ 友だち	H 3種類 すべて	
21.76	7**	.25	男子	7(3.8)	2(0.8)	5(-0.9)	11(0.9)	11(-0.3)	25(-2.2)	14(-2.1)	23(-1.3)
			女子	37(-3.8)	15(-0.9)	8(0.9)	7(-0.9)	12(0.3)	4(0.2)	26(2.1)	31(1.3)
			合計	109	35	13	18	23	65	40	54

**p<.01

表4 学校享受感尺度の因子分析結果と記述統計量

番号	項目内容	平均	(SD)	負荷量
1	私は学校に行くのが楽しみだ	2.91	(.82)	.82
2	学校は楽しくて、1日あっという間に過ぎてしまう	2.71	(.93)	.78
3	学校は楽しいので、少しぐらい体の調子が悪くても学校に行きたい	2.54	(.97)	.80
4	学校では、楽しいことがたくさんある	2.85	(.82)	.76
5	学校にいるのがいやなので、授業が終わったらすぐに家に帰りたい*	2.85	(.93)	.56
6	学校がなければ毎日つまらないと思う	2.68	(.97)	.62
7	日曜日の夜、また明日から学校だと思うと気分が重くなる*	2.24	(1.00)	.45
8	今の学校は楽しいので、いつまでもこの学校にいられたらよいのと思う	2.63	(.92)	.71
9	学校では、いやなことばかりある*	3.05	(.77)	.54
10	私はこの学校が好きだ	2.97	(.84)	.70

*は逆転項目 寄与率 = 46.74

表5 学校享受感の性別および「居場所」の有無別平均値(SD)と分散分析の結果

	「居場所」あり	「居場所」なし	性別主効果	「居場所」有無主効果	交互作用
男子	27.13 (6.33)	25.16 (5.61)	.11n.s.	40.05***	13.32***
女子	30.07 (5.53)	22.71 (6.86)			

***p<.001

表6 学校享受感の性別・「居場所環境」別の平均値(SD)と分散分析の結果

	A なし	B ひとり のみ	C 家族 のみ	D 友だち のみ	E ひとり +家族	F ひとり +友だち	G 家族+ 友だち	H 3種類 すべて	性別	主効果 「居場所環境」 8分類	交互 作用
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	F値	F値	F値
男子	25.06 (5.61)	23.17 (6.54)	23.20 (3.03)	26.55 (6.70)	25.50 (6.69)	27.78 (4.41)	31.00 (6.77)	30.41 (5.48)	3.81 $n.s.$	14.19***	1.82 $n.s.$
女子	22.69 (6.76)	26.67 (5.50)	25.14 (4.53)	28.67 (7.63)	25.75 (3.65)	30.77 (5.32)	32.40 (5.17)	32.71 (4.12)			
(AB)<(FGH) (CE)<(GH)											

*** $p<.001$

$p<.001$)であり、「居場所」がある生徒の方がいない生徒よりも学校享受感が有意に高いことが示された。また「居場所」がある生徒において、性別の単純主効果が有意($F[1, 337] = 14.56, p<.001$)であり、女子の方が男子より学校享受感が高くなることが示されたが、「居場所」がない生徒においては、性別での有意差は認められなかった。よって、性別に関係なく「居場所」がない生徒よりある生徒の方が学校享受感が高く、さらに「居場所」がある生徒においては、男子よりも女子の方が高いということが明らかとなった。

(3) 「居場所環境」8分類と学校適応との関連

「居場所環境」8分類と学校適応との関連を検討するために、学校享受感尺度について性別と「居場所環境」8分類による2要因分散分析を行った(表6)。「居場所環境」8分類の主効果のみ有意差が認められ、多重比較の結果(Tukey-HSD法, 5%水準), A群(なし)とB群(ひとりのみ)がF群(ひとり+友だち)・G群(家族+友だち)・H群(3種類すべて)より学校享受感が有意に低く, C群(家族のみ)・E群(ひとり+家族)がG群(家族+友だち)・H群(3種類すべて)より有意に低かった。「居場所環境」の中に他者と関わる「居場所」があること, さらに「友だちのいる居場所」があるかどうか, 学校適応には関連があることが示された。

(4) 3種類の「居場所」の有無による学校適応との関連

「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」の3種類の「居場所」のどれが, 学校適応に関連が強いのかを検討するために, 3種類の「居場所」の有無を説明変数(ないを1, あるを2と

してダミー変数を割り当てた), 学校享受感を目的変数として重回帰分析(強制投入法)を行った(表7)。その結果, 男子・女子とも有意な関連が認められた。男子においては, 「居場所環境」の中の「友だちのいる居場所」の有無について, 女子においては, 「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」の有無について, 有意な標準偏回帰係数が得られた。つまり, 男子においては「友だちのいる居場所」がある方が, 女子においては「友だちのいる居場所」「家族のいる居場所」がある方が学校享受感が高いことが明らかとなった。

表7 3種類の「居場所」の有無を説明変数, 学校享受感を目的変数とした重回帰分析の結果

	男子	女子
「自分ひとりの居場所」の有無	-.06	.12
「家族のいる居場所」の有無	.15	.16*
「友だちのいる居場所」の有無	.32***	.47***
説明率(R^2)	.14***	.33***
	* $p<.05$	*** $p<.01$

考 察

1. 中学生の「居場所環境」について

(1) 「居場所環境」の自由記述(表2)について

本研究の対象となった中学生の多くが, 「自分の部屋」と「教室」と「家」を「居場所」に選んでおり, この3つが主要な「居場所」となっていた。生活環境の拠点となっている場所が「居場所」と認知されやす

いことが推測される。

(2) 「居場所環境」と個人属性との関連(表3)について

「居場所」があると答えた生徒の中で、約7割の生徒が、1つの「居場所」だけではなく、種類の違う「居場所」を複数持っていることが明らかとなり、「居場所環境」という視点の導入は、意味のあるものであることが確認された。個人属性により「居場所環境」に違いがあるか否かを検討したところ、学年での差はなく、性別による差が認められた。A群(なし)では男子が多く、F群(ひとり+友だち)、G群(家族+友だち)では女子が多かった。「居場所」がないという回答が男子に多いという結果は、杉本・庄司(2006)の結果と同様であったが、この点においては、発達段階と性差を考慮した「居場所」の規定要因を検討するさらなる研究が必要と考える。「友だちのいる居場所」を含む「居場所環境」を持つ女子が男子よりも多いことは、男性や他の発達段階に比べて、中学生女子の親和動機が高いとする研究結果(杉浦, 2000)や、中学生女子では、一緒にいることに重点を多く「親密確認」が高いという結果(榎本, 1997)とも一致する。中学生女子の友だちとの関係を重視する傾向が「居場所」選択にも表れていると考えられる。

2. 「居場所環境」と学校適応との関連

(1) 「居場所」の有無と学校適応との関連(表5)について

個人の持つ「居場所環境」と学校適応には関係があることが明らかとなった。まず、「居場所」の有無と学校適応との関連では、性別に関係なく「居場所」のある生徒の方がいない生徒よりも学校享受感が高いことが示された。「居場所」がある生徒においては、性差が示され男子よりも女子の方が学校享受感が高かった。よって、「居場所」を持っている生徒は持っていない生徒よりも学校適応が高いが、「居場所」があると女子の方が男子より学校適応が高いといえる。古市(2004)の中学生における学校生活享受感情の調査では、男子より女子の方が有意に高いという結果となっている。よって、「居場所」がある生徒においては、女子の方が高いというのは、一般的傾向の表れといえるが、「居場所」がない生徒において、男女差が認められなかったことは、本調査の特徴といえる。

(2) 「居場所環境」8分類と学校適応との関連(表6)について

「居場所環境」によっても学校適応が異なることが示された。「居場所環境」の中に他者と関わる「居場所」、特に「友だちのいる居場所」がある生徒の学校享受感が高かった。「友だちのいる居場所」の多くは、「学校」「教室」など学校が挙げられている。つまり「友だちのいる居場所」がある生徒の多くが、学校内に「居場所」がある生徒といえる。よって、田中・田嶋(2004)の結果と同様に、学校内に「居場所」がある生徒の学校享受感が高いことが確認された。

(3) 3種類の「居場所」の有無による学校適応との関連(表7)について

3種類の「居場所」の有無を説明変数、学校享受感を目的変数とするダミー変数を用いた重回帰分析により、3種類の「居場所」の有無が学校享受感に関連していることが示された。しかし、特に男子においてはその説明率が低く、他の要因による影響が女子よりも大きいといえる。「友だちのいる居場所」の有無が、男女双方において有意な関連を持っているということは、「居場所環境」8分類による分散分析の結果と同じであり、前述したように先行研究の結果(田中・田嶋, 2004)を支持するものである。また、女子においては「家族のいる居場所」の有無も関連していることが示された。信頼感と学校適応との研究における、親友との信頼関係は良いが、親との信頼関係が良くない場合は、「反社会的傾向」が高くなるという結果(酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村, 2002)や、不登校傾向に直接影響を及ぼす要因は「対友人ストレス」であるが、間接的な要因として「対親ストレス」が存在しているという結果(菊島, 1999)からも、この時期の家族関係の重要性が示されている。思春期で家族との心理的距離も広がる時期ではあるが、家を「居場所」と感じられなくなってしまうということは、不適応問題へとつながる危険性を持っているといえよう。

総合的考察と今後の課題

近年の児童・生徒に関する発達研究は、天岩(2004)が指摘するように、「児童・生徒をとりまく環境(学校・友人・家庭)と本人のもつ行動特徴や認知の仕方を合わせて検討した研究」が主流となってきている。

「居場所環境」とは、個人を取り巻く環境、個人の認知を包括的に捉えることができるため、中学生の諸問題への対応における1つの視点となりうるのではないかと考えられる。本研究において、「居場所環境」が学校適応に影響を及ぼす可能性を見出せたことは、「居場所環境」を整えるというアプローチが学校不適応問題にも有効であることを示唆していると考えられる。

「居場所」という視点をを用いた学校における実践としては松田(1999)、高柳(2000)、伊藤・浅利(2003)の実践研究が挙げられる。これらは、学校での授業や行事など「活動」に注目し、「活動」の後に「安心感」「安全感」「やりがい」といった「居場所感」の因子が高まることを報告している。これらの因子は、「友だちのいる居場所」の「被受容感」「自己肯定感」の機能が高いという特徴(杉本・庄司, 2006)と類似している。よって、学校において「友だちのいる居場所」を感じられていない生徒に対しては、授業や行事などの「活動」を通して援助を提供していくことが考えられる。

また、不適応問題に対しては、村瀬・重松・平田・高堂・青山(1996)、笠井(2003)、徳田(2004)の実践報告がある。これらの実践においては、まず、施設、キャンプ、カウンセリングといった「場」を提供し、その「場」において「ありのままの自分で居られる」「安心して自己表現できる」等の安心感を提供することで適応問題への解決を図っている。したがって、「居場所」がない生徒、あるいは「自分ひとりの居場所」しかなく、学校適応に問題を抱えている生徒に対しては、「活動」といった積極的な対応よりも、「被受容感」「精神的安定」を感じられる場の提供、具体的には、養護教員やスクールカウンセラーのいる保健室や相談室などでの対応が有効といえるのではないだろうか。しかし、これまでのように1つの「居場所」の提供だけではなく、個人の「居場所環境」をアセスメントし、足りない場所を様々な複数の場所で補っていくといった視点が重要であろう。

今後、「居場所環境」と個人の性格、対人信頼感など内的な要因との関係、不適応問題行動との関係、「居場所環境」の発達の変化を検討することが課題として挙げられる。また、今回の調査は、公立中学校1校のみを分析した。公立中学校であるため、ある程度の代表性は確保されていると考えられるが、今後は都

心部あるいは農村部の学校との比較を行うことで、地域差を検討することも必要であろう。最終的には、発達段階における「居場所環境」とその影響を包括的に明らかにし、問題へのアプローチを提案していくことが課題であると考えられる。

引用文献

- 天岩静子 2004 児童・生徒の発達研究の動向 教育心理学年報, 43, 48-57.
- 安斎智子 2003 「居場所」概念の変遷 発達, 24, 33-37.
- 榎本淳子 1997 青年期の友人関係の発達の变化 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 144.
- 深谷昌志・永井聖二・山田剛 2001 居場所としての「学校」に関する考察 - 時系列の変化に視野をおきながら - 日本子ども社会学会第8回大会抄録集, 53-54.
- 古市裕一 1991 小・中学生の学校ざらい感情とその規定要因 カウンセリング研究, 24, 123-127.
- 古市裕一・玉木弘之 1994 学校生活の楽しさとその規定要因 岡山大学教育学部研究集録, 96, 105-113.
- 古市裕一 2004 小・中学生の学校生活享受感情とその規定要因 岡山大学教育学部研究集録, 126, 29-34.
- 五十嵐哲也・萩原久子 2004 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 教育心理学研究, 52, 264-275.
- 伊藤亜矢子・浅利優子 2003 中学生の学級への居心地を高める支援に向けた基礎的研究 - 学級風土と行事による居場所感の変化 - 日本心理臨床学会第22回大会発表論文集, 235.
- 笠井孝久 2003 不登校児キャンプに参加する子どもたち - 不登校児の居場所としてのキャンプ - 千葉大学教育実践研究, 10, 57-64.
- 菊島勝也 1999 ストレッサーとソーシャルサポートが中学時の不登校傾向に及ぼす影響 性格心理学研究, 7, 66-76.
- 松田孝志 1997 現代高校生における居場所の内包的な構造 筑波大学教育研究科カウンセリング専攻修士論文抄録集, 31-32.

- 松田孝志 1999 試行錯誤の居場所づくり カウンセリング研究, 32, 95-98 .
- 文部省 1992 登校拒否(不登校)問題について - 児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して(学校不適応対策調査研究協力者会議報告) 教育委員会会報, 44, 25-29 .
- 村瀬嘉代子・重松正典・平田正子・高堂なおみ・青山直英 1996 居場所を見失った思春期・青年期の人々への統合的アプローチ - 通所型中間施設に通っていた人の治療・成長促進要因 - 研究助成論文集, 32, 151-159 .
- 小畑豊美・伊藤義美 2003 中学生の心の居場所の研究 - 感情と行動及び意味からの考察 - 情報文化研究, 17, 155-167 .
- 大久保智生・青柳肇 2000 心理的居場所に関する研究(2) - 居場所感尺度作成の試み - 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 161 .
- 大久保智生・加藤弘道 2005 青年期における個人環境の適合の良さ仮説の検証 - 学校環境における心理的欲求と適応感との関連 - 教育心理学研究, 53, 368-380 .
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, 50, 12-22 .
- 生涯学習政策局子どもの居場所づくり推進室 2004 子どもの居場所づくり 地域子ども教室推進事業の実施にあたって 教育委員会月報, 656, 2-25 .
- 杉本希映・庄司一子 2006 「居場所」の心理的構造とその発達の变化 教育心理学研究, 54, 289-299 .
- 杉浦 健 2000 2つの親和動機と対人疎外感との関連 - その発達の变化 - 教育心理学研究, 48, 352-360 .
- 住田正樹 2003a 子どもたちの「居場所」と対人的世界(住田正樹・南博文 編 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在)九州大学出版会 3-17 .
- 住田正樹 2003b 子どもたちの「居場所」と対人関係(住田正樹・南博文 編 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在)九州大学出版会 101-168 .
- 高柳真人 2000 学校における生徒の居場所作りについて 研究紀要 筑波大学付属坂戸高等学校, 38, 99-104 .
- 田島彩子 2000 青年期のこころの「居場所」 - 「居場所」感覚と抑うつ感 - 日本心理臨床学会第19回大会発表論文集, 258 .
- 田中麻貴・田嶋誠一 2004 中学校における居場所に関する研究 九州大学心理学研究, 5, 219-228 .
- 徳田仁子 2004 スクールカウンセリングを通して生活環境を整える - 不登校生徒の「居場所」さがし - 臨床心理学, 4, 213-217 .
- 富永幹人・北山修 2003 青年期と「居場所」(住田正樹・南博文 編 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在)九州大学出版会 381-400 .
- 堤 雅雄 2002 「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱 島根大学教育学部紀要 人文・社会科学, 36, 1-7 .
- 上野ひろ美 1992 「居場所」(身体)と「関わり」(対話) - 共同感情の組み換え - 現代教育科学, 10, 28-30 .
- A Study on the Relationship between "Environment of Ibasho" for Junior High School students and Enjoyment of Attending School
- Kie SUGIMOTO & Ichiko SHOJI
- The purpose of this study was to examine the environmental characteristics of places at which junior high school students feel comfortable and to investigate the relationship between those environmental characteristics and enjoyment of attending school. The main results were as follows. (1) Most junior high school students reported feeling comfortable when they were in their rooms, at school and at home. (2) There was a relationship between student's enjoyment of attending school and their choice of place of comfort.
- Key word: "Environment of Ibasho", enjoyment of attending school, junior high school student
- (2005年4月15日受稿:2006年9月16日受理)